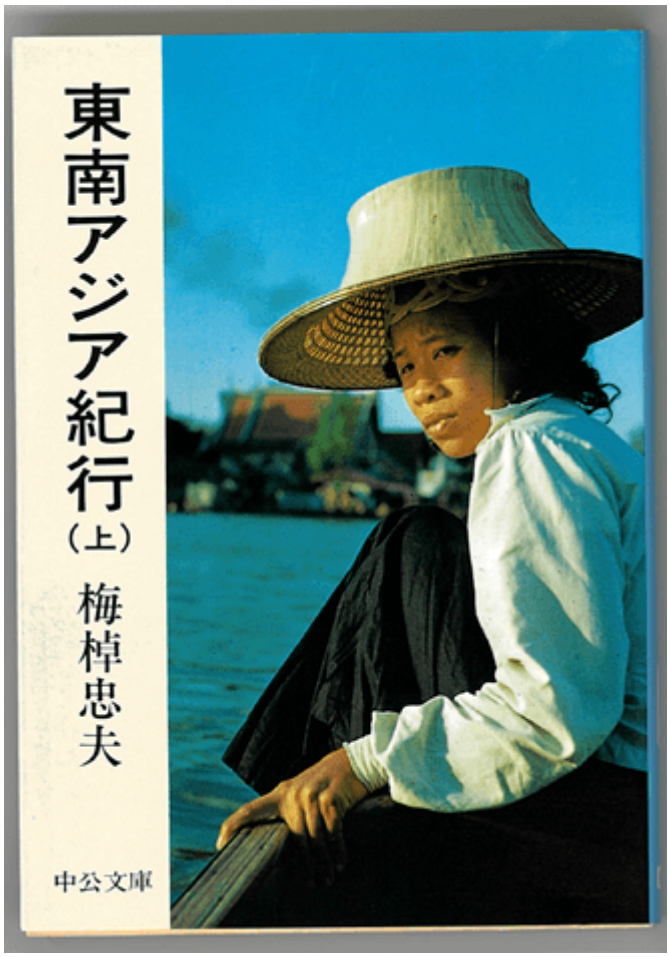
梅棹忠夫『東南アジア紀行』

北澤直宏

本書は、生態学者・民族学者として文明間の比較を試み、後に国立民族学博物館の初代館長を務めた梅棹が、タイ・カンボジア・ベトナム・ラオスを訪れた際の旅行記である。内容の大半は、1957年から翌年にかけて隊長として参加した「大阪市立大学東南アジア学術調査隊」での調査や移動の日々に割かれているが、そもそも当時の東南アジアは、第二次世界大戦の記憶が色濃く残り、日本との国交回復から間もない時期である。自動車で各地を訪れながら、書籍で得た知識と自身の観察を突合せている著者の記述には、既に失われてしまった景色や現在にも通ずる文化が幾つも含まれており、執筆から半世紀以上経ていながら今なお得られる知見は多い。また、私的記録としての性格が強いことから、資金集めや行政機関との折衝、道中のトラブルに至るまで、公的記録では描かれない気苦労の数々が記されていることも特徴である。平易な文章ながらも、国籍や分野が異なる専門家らと調査を重ねていく様子は、読者に対し、東南アジアの社会状況のみならず現地調査の醍醐味を伝えてくれるだろう。



出典:

- 梅棹忠夫『東南アジア紀行』（中央公論社、1964年／のち中公文庫 全2巻、1979年）